

受領者投稿

人を感じて、動くこと

早稲田大学 人間科学学術院 准教授 三浦 哲 都
(2015 年度受領者)

私たちは身体を動かすとき、環境の情報を利用して、環境の情報を利用して自覚的です。たとえば、道路を歩くときは、向こうからやってくる人を見て、ぶつからないように避けて歩きます。信号が赤であれば、止まって待ちます。サッカーをするときは、味方や相手がどこにいるのか、ボールがどこにあるのかを見て確認し、それに応じて動きます。私たちの運動には意図があり、それを達成するために、環境の情報を利用して動くと考えます。

一方で、環境の情報が私たちの運動を規定してしまうことには無自覚です。たとえば、誰かと並んで歩くときに、意図せずにその人と足並みがそろってしまうことがあります。また、音楽に合わせてリズムカルに身体を上下に動かすときは、ビート音が鳴った時に膝を伸ばして身体を上げることは難しく、ビート音が鳴った時に膝を曲げて身体を下げる協調パターンへと意図せずに切り替わってしまうこともわかっています。このような現象は、人の知覚と運動の協調に関する興味深い研究テーマです。

同様の現象は、2人が向かいあってお互いを見ながら、ただ黙って立っている課題においても生じることが報告されています。この課題では、2人は気づかぬうちに姿勢動揺が同期します。2016年度に採択していただいた研究では、どのような情報がこの2者間の同期にかかわるのかを調べるために、人と同じくらいの大

きさのディスプレイを購入しました。そして、立っている人の全身の映像をディスプレイに映しだし、その前に人を立たせて、どのように姿勢が揺れるのかを調べ

ました。その結果、ディスプレイの前に立ったときの姿勢動揺は、実際の人の前に立っているときの姿勢動揺とは異なることがわかりました。特に興味深いのは、ディスプレイの前に立っているときの姿勢動揺の同期が左右方向に限定されることです。この研究結果から着想を得て、人と人の同期に関する研究を進め、2019年には日本顔学会で原島賞を受賞しました。

2019年4月から、早稲田大学人間科学学術院に移り研究室を持ちました。現在は、当時の研究をさらに拡張し、踊る人と観る人の身体について研究を進めています。この研究でも当時のディスプレイを用いて、踊る人と観る人の相互作用を検証しています。人の「人を感じて、動いてしまう」という性質の解明は、人と人の相互作用、さらには人と機械の相互作用においても重要な意味を持つ研究テーマであると考えています。

ご支援により、これまで自由に研究を進めることができました。改めて感謝申し上げます。

